

文学部人文学会シンポジウム 「防災勉強会」報告書

シンポジウム概要

(文責:2020 年度広報企画委員)

2020 年 2 月 26 日 (水) 15:00 ~ 17:00 に 34 号館 B201 教室にて、文学部人文学会による「防災勉強会」が開催された。当日は、人文学会の会員だけでなく、防災・救急救助総合研究所の研究員の方などさまざまな方面の方々にご参集いただいた。以下に概要を示し、報告書とする。なお、以下の内容に加えて、初等教育コースの鈴木江理子教授は、震災という非日常における「外国人」という視点から、多文化化する日本の現状と課題を問いかけた。今回の防災勉強会は、防災拠点大学としての文学部の位置づけが明確化した重要な機会となった。

開会挨拶

担当主幹：松田俊哉

9 人の先生方の題目は、日本文学、文化財復旧、多文化社会、災害弱者、地域災害誌というように多種多様で、これら提言の豊かさは文学部の幅広い研究領域そのものである。防災を多角的に捉えられる機会として知見を皆さんと共有したい。文学部の特性を活かした勉強会になると期待している。

日本文学と災害—火災・地震を中心に— (日本文学・文化コース)

平安時代の火災・消火—蜻蛉日記を中心に—

中古・松野彩

日本文学・文化コースは、「日本文学と災害—火災・地震を中心に—」というテーマで、文学を専門とする 4 人の教員が、古い時代を専門とするものから、中古、中世、近世、近代と時代順に発表を行った。松野は、平安時代の文学作品が専門であるため、『蜻蛉日記』(平安中期の成立、著者は藤原道綱母)の火災関連の記述について取り上げ、下巻に集中して見られる五例の火災のうちの三例では、作者が夫の愛情をはかる指標として、夫の火事見舞いを描いていることを指摘した。また、平安時代の消火方法についても言及した。

「平家物語」と「方丈記」に見る地震

中世・濱中修

源平の合戦が終わったばかりの元暦二年七月、近畿地方を大地震が襲った。『平家物語』では、「白河・六波羅・京中打ち埋まれて死ぬるもの、いくらといふ数

を知らず」などというこの惨事は、「十善帝王、都を出させ給て、御身を海底に沈め、大臣公卿大路をわたして、その首を獄門にかけ」たことによる平家の怨霊のせいかと記している。怨霊などと一見すると非合理の言辞のように見えるが、鎌倉政権の苛烈な政治にその遠因を求めるのは、社会的に意味のある批判といえるだろう。また鴨長明は仏教者らしく、この大地震を無常のひとつとして理解している。両作品とも、この未曾有の大地震に対して、変にドグマ的になったり、情緒的になったりしないで、ある意味、健全で合理的な立場から言及していることが見てとれる。

明暦の大火と仮名草子

近世・村田裕司

江戸時代初期の仮名草子作者、浅井了意の二作、万治四年（1661）刊の『むさしあぶみ』と、寛文二年（1662）刊の『江戸名所記』を取り上げた。前者の『むさしあぶみ』は、江戸三大大火の筆頭に挙げられる「明暦の大火」（1657）とその後始末を記した見聞的な読み物で、日本の災害史に関する書籍にしばしば言及される作品である。一方、後者の『江戸名所記』は、刊本による江戸地誌の嚆矢とされる読み物で、大火から五年を経過した江戸の繁栄の様子が描かれて、「災害復興文学」としての意味を持つ。了意の執筆意図については詳しい分析が必要だが、この二つの仮名草子を並べた時、そこに、ひとつの都市の災害をめぐる「破壊と再生のドラマ」が浮かび上がってくるであろう。

「関東大震災」と生成した表現—横光利一を事例に—

近代・平 浩一

災害によって、文化形態は変容することがある。関東大震災の翌年に発表された小説、横光利一「頭ならびに腹」（『文藝時代』1924.10）は、その典型とされる。この小説の冒頭部、「真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で馳けてゐた。沿線の小駅は石のやうに黙殺された」というフレーズは、機械・物を徹底的に擬人化したフレーズである。さらにその後、この小説では、人間がロボットのように描写されていく。それは、人間と機械とが反転していく社会を予見したものと見ることができる。震災後の帝都復興によって築かれた社会のあり方は、「頭ならびに腹」の冒頭部に、既に凝縮され表現されていた。以上、文化・災害・社会の密接な関係を浮かび上がらせる、ひとつの事例を報告した。

東日本大震災による栃木県北部の文化財被害とその復旧

—国士舘大学考古学実習によるレスキューの取り組み—

眞保昌弘（考古・日本史学コース）

平成23年3月11日に起きた東北地方太平洋沖地震による栃木県の国県指定文化財等被害は、史跡や有形文化財が90%以上を占めた。特に深度が深いと揺

れが増幅される「地震基盤」の浅深から県東北部が甚大であった。国士舘大学考古学研究室が毎年長期休業期間に約 40 日間実習する那須郡那珂川町では、県立なす風土記の丘資料館をはじめ資料館、収蔵庫で仏像、土器、石器など約 700 点、整理箱約 2000 箱が倒壊した。研究室（日本女子大学、国学院大学栃木校も参加）では平成 23 年 8 月から 3 ヶ年、のべ 146 日、約 3500 人により文化財の救出、洗浄、乾燥、再分類、接合、修復、再展示を実施した。これを契機に平成 25 年 12 月、大学と町では『文化財の調査研究活用事業に関する相互協力協定書』を締結することとなった。災害を無くすことはできない、しかし減らすことはできる。有効な手段として歴史を学ぶことがあげられ、未来への財産と位置付けられる。そのことを再認識する貴重な機会となった。

災害弱者を知る (1) 災害弱者の社会的構成 郡司菜津美（教育学コース）

災害弱者を知る。いまこの時ではなく、いつか災害の時に弱者になる者のことである。災害が起きていない今、いつかの時に備えること（「防災教育」）が、いざという時の災害弱者の安全を左右する。

しかし人は動機がなければ学習しない。自分ごとの動機の高い、やらされ仕事ではない「防災学習」にするためにはどうしたら良いか。安全なこの場所で、未来の災害弱者の安全を守るために、みなでいっしょに協同学習してみよう。題して「協同で花紙をつないでいく体験ワーク」（写真参照）。



共同して輪をつなげるこの単純な能力が、防災学習の要である。即興で共同するみんなの能力であり、「対話的な学び」として我が国が推進している学習でもある。周りの人と即興で共同することができる、支援を支える、そうした人材を国士舘大学として育成していくことが災害弱者を災害弱者としない備えのきっかけになる。

災害弱者を知る (2) 知的・発達障害者への支援 本間貴子（教育学コース）

毎年のように甚大な災害が発生する昨今、災害時の障害者への支援のあり方に関心が高まっている。知的・発達障害者は、その障害特性から通常の人よりも避難に支援を要する「災害弱者」となる可能性が高い。例えば自閉症スペクトラム障害（ASD）は、目の前に視覚的に示されていないことや未経験のことを想像することが困難であり、通常とは異なる状況から強いストレスを受けてしまう。知的障害者も通常の人と同じように情報を得ることが困難であり、わからないということを自分からは伝えることが困難なのでストレスを感じてしまう。知的・発達障害者に対しては、避難所で落ち着くことが可能な刺激の少ない環境を用意

したり、見通しを持つことができるように情報を視覚的に（イラスト等で）示したりすることが必要と思われる。

現在、特別支援学校や社会福祉施設では、知的・発達障害者に避難所での生活を経験してもらうための宿泊型の避難訓練の試みを行うなど、避難訓練の在り方を工夫する学校施設が出てきている。また、通常の避難所に避難をすることが困難な方が避難できる福祉避難所の調査も行われ、次第に整備も進んできている。障害者とその家族が災害時に安心して避難生活を送ることができるように、平常時のシミュレーションや、自治体との連携等の「備え」が重要である。

地域災害誌の理解にもとづく防災対応の重要性

—首都圏における大規模火災と土石流災害の事例—

磯谷達宏（地理・環境コース）

災害予防のための最重要課題の一つに、「ある地域で生じやすい災害の特性とそれに応じた避難のあり方について地域住民（生徒・学生を含む）への普及啓発を行う」という課題がある。これに対して本学文学部では、地理学その他の専門性を生かして「地域災害誌」を提示することができる。例えば、世田谷キャンパス付近を含む木造住宅密集地域では、大地震に伴い大規模火災が発生したときに、どのような緑地に逃げれば安全性が高いかが、致命的に重要である。これについては関東大震災時の経験などから、正方形に近く常緑広葉樹の多い10ha程度以上の緑地に逃げるのが安全の目安とされている。また、多摩丘陵の川崎市生田緑地付近で土石流発生の履歴を研究すると、1958年の狩野川台風来襲時には大規模な土石流とそれに伴う災害が発生していたことがわかった。そのため、丘陵地の緑地の谷に隣接した住宅地付近では、土石流の発生も想定した対応を行っておく必要がある。

閉会挨拶

文学部長：中村一夫

国士舘大学における防災への取り組みは、2011年に開設された防災・救急救助総合研究所の活動や全学生を対象とする防災教育の実施を通して、本学の建学の精神を具体化するものとして位置付けることができる。翻ってわが文学部でも、防災や救命救助に対して、教育、歴史、地理、文学の立場から、人文科学の知見を活かすことができると考えている。人と社会のありようを徹底的に考究する人文科学は、幸福な人生や豊かな社会を構築するために欠かせないものである。それは日常のすぐ傍らにある非日常（災害）においても同様である。この度の防災勉強会は文学部の教職員、学生の意識を高めるものとなったが、今後は大学周辺の地域との連携を図り、持続可能性のある文学部ならではの実践的な取り組みの実現を目指したい。

最後にこの防災勉強会の催行に際し、企画・運営に携わった文学部の広報企画委員会の方々、また発表者として登壇した諸先生方に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

当日の様子が掲載された HP 記事はこちら→

